

The effects of format differences on multiple-choice listening tests : focusing on the presentation of questions and options

著者	飯村 英樹
内容記述	Thesis (Ph. D. in Linguistics)--University of Tsukuba, (A), no. 5983, 2012.3.23 Includes bibliographical references (leaves 176-193)
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/2241/117523

氏 名 (本籍)	飯 村 英 樹 (茨 城 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5983 号		
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学部研究科		
学 位 論 文 題 目	The Effects of Format Differences on Multiple-Choice Listening Tests: Focusing on the Presentation of Questions and Options (多肢選択式リスニングテストにおける質問文と選択肢の提示様式が聴解に与える影響)		
主 査	筑波大学教授		久保田 章
副 査	筑波大学教授	博士 (言語学)	卯 城 祐 司
副 査	筑波大学教授	Ed.D. (教育学)	平 井 明 代
副 査	茨城大学准教授	Ph.D. (外国語・第二言語教育学)	齋 藤 英 敏

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、英語の多肢選択式リスニング・テストにおける質問文と選択肢の提示時期（リスニング本文の前か後ろか）と提示モード（文字か音声か）の違いが、受験者の聴解の結果とプロセスに与える影響について検証し、より妥当性、適切性の高いテスト様式を開発することである。

本研究は、日本人学習者（大学生）を対象として、5つの実験的研究と7つのリサーチ・クエスチョンによって構成されている。実験1では、質問文と選択肢の提示モードを文字に固定し、2つのリサーチ・クエスチョンを設定して、提示時期が異なる4種のテスト形式の影響を比較検証した。その結果、質問文の提示時期の違いは聴解の結果には影響を与えないが、一方で、提示時期の違い、とりわけ事前提示の有無は、受験者のテストの難易度判定に大きな影響を与えることが示された。

実験2は、質問文と選択肢の提示モードを音声に固定して、質問文の提示回数異なる2種類のテスト形式の影響を比較検証した。質問文の提示回数はテストの結果だけでなく、テストの項目困難度、信頼性、弁別度などにも影響を与えないことが分かった。

実験3では、質問文と選択肢の提示時期と提示モードの異なる4種のテスト様式の影響を比較した。検証の結果、質問文の提示モードはテスト結果に影響を与えること、すなわち、質問文を音声で提示するとテストの困難度が上昇し、文字で提示すると低下することが判明した。

実験4では、実験3の分析結果を検証するため、実験3の4つのテスト様式とテスト項目（本文、質問文、選択肢）の関係について調査を実施した。質問文と選択肢の提示様式の違いに影響を与える要因として単語、文、談話、タスク処理という4つのレベルを取り上げて分析を行った結果、単語、文、談話レベルの要因は提示様式の違いに関わらずテスト結果と関係があるが、タスク処理のレベルでは、提示モードの違い（文字と音声）によって異なる傾向が見られた。

実験5では、同様に実験3の4つのテスト様式を用いて、質問文と選択肢の提示様式の違いが、回答に際しての受験者のストラテジー使用とテストの印象（難易度と適切さ）にどのような影響を与えるか検証した。

2つのリサーチ・クエスチョンについて発話プロトコル法と半構造化面接法を用いて分析した結果、受験者の熟達度に関わらず、テスト形式の違いは受験者のストラテジー使用に影響を与えることがわかった。また、一方では、テスト形式の違いは、受験者のテストの困難度と適切さの印象に影響を与え、その印象は熟達度によって異なることが示された。

以上の成果に基づき、多肢選択式リスニングテスト開発における質問文と選択肢の4つの提示様式それぞれの妥当性、適切性を考察し、最終的に質問文と選択肢両方を音声提示する様式の有効性、可能性について議論している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

TOEFL、TOEIC、英検など国内外の主な英語熟達度テストにおけるリスニング・テストでは、(a) 質問文と選択肢を両方とも本文の前に文字提示する形式、(b) 質問文は文の後に音声提示し、選択肢は本文の前に文字提示する形式、という2種類のテスト様式が伝統的に採用されている。しかしながら、理論的にも、実践的にも、いずれかの様式が唯一最適なテスト方法であるという保証は得られていない。したがって、本論文において質問文と選択肢の提示時期と提示モードの違いによる聴解への影響について検証することは、今後の英語リスニング・テスト開発に大きく貢献するものである。

先行研究では等閑視されていた質問文と選択肢の提示モードの違い、提示モードと提示時期の関係について、詳細で多様な量的分析によって明らかにしただけでなく、テストの妥当性をさらに向上させるため、異なるテスト様式に対する受験者の印象やストラテジーのような回答のプロセスという質的な検証も実施した点を評価できる。さらには、多肢選択式リスニング・テストにおいて、質問文の提示モードは項目困難度に影響を与え、提示時期はリスニングのプロセスに影響を与えるという示唆が得られた意義も大きい。

一方で、テスト全体の妥当性の決定には、受験者の能力、テスト様式、テスト問題の難易度等の要因が複雑に関係するので、実験結果に基づく結論の一般化には一層の慎重さが求められるであろう。また、質問文が文字提示される場合、リーディングの要素はリスニングの結果とどの程度関係するかについての検証がなされるならば、より綿密な議論が展開できると期待される。

以上のような課題はあるものの、本論文の研究テーマは明確で、予備実験の実施、コンピュータの活用、テスト様式以外にテスト結果に影響を与える要因の分析など、研究計画、分析方法も念入りで適切であり、テスト論の分野で高い評価に値すると結論できる。

平成24年1月31日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。